RIKKYO MOVE
More Valuable Education
立教大学　大学教育開発・支援センター

Newsletter
Center for Development and Support of Higher Education
30

開催報告

春学期FDプログラム

「大学教育における生成系AI利用のあり方―ChatGPTの取り扱いと学問的誠実性の問題を中心に―」

［2023年6月23日］

大学教育開発・支援センターは、ChatGPT をはじめとする生成系 AI に対する教職員の理解を深め、その活用法や注意事項を共有し、それに伴う学問的誠実性の問題について考える FD プログラムをオンラインで開催しました。登壇者として、生成系 AI の教育的活用に造詣が深い吉田塁先生（東京大学大学院工学系研究科准教授）、および、ELSI（倫理的・法的・社会的課題）の観点から AI の研究を進められている村上祐子先生（本学人工知能科学研究科・文学部教授）をお迎えしました。100 名を超える教職員の皆様にご参加をいただきました。

吉田先生には、「大学教育における生成系 AI の活用の可能性」というテーマでご講演いただきました。吉田先生は、まず、ChatGPT が文章を出力する仕組みとそれを利活用するためのプロンプト（ChatGPT に入力するテキスト）の重要性について話されました。また、授業のシラバスや課題作成への活用の可能性についても言及され、生成系 AI が学習のプロセスを支援し、学びをより深めるツールになり得る国内外の事例を解説いただきました。

村上先生には、「ELSI の観点からの今後の大学教育と生成系 AI の付き合い方」というテーマでご講演いただきました。まず、大学のあり方を考える際、大学は「学生が学問を身に付ける上で安心して失敗できる場」であるべきであり、生成系 AI による教育効果測定や学生管理という側面を推進すると、学生が安心して学ぶ場にならないという指摘がありました。また、「生成系 AI を全面的に使わせないということは、学ぶ権利や情報にアクセスする権利の侵害に当たる可能性がある」とし、学生が生成系 AI を使用することを前提にして、課題や評価を見直すべきであることを述べられました。

村上 祐子 先生

吉田先生、村上先生によるご講演の後には、当センターの小澤康裕センター長（本学経済学部准教授）がファシリテーターとなり、両先生と意見交換を行いました。「生成系 AI が台頭する中で我々が教育の面において変えていかなくてはならないこと、変えてはならないことは何ですか」という質問に対し、吉田先生は「課題の出し方などは変えなくてはならない場合もあるが、まだ ChatGPT の出力は信頼できないところがあるので、高等教育で育むべき専門性、批判的思考力、問題解決力は意味のあるスキル・技能・認知能力であり、本筋はまだそれほど大きな影響を受けない」とお答えになりました。村上先生は「AI（人工知能）の普及にかかわらず、生身で最低限の能力を担保しないといけない」と回答されました。

吉田 塁 先生

全体を通じて、まず教職員が生成系 AI を実際に使ってみること、学生と共に学び続けることが大切であると同時に、生成系 AI を活用する主体である我々の知恵・思考・意思決定や、特に教育の観点においてはこれまで以上に生身で学生と向き合う姿勢が重要となるということを考えさせられる機会となりました。

ご登壇、ご参加いただいた皆様に改めまして御礼申し上げます。

助教　神田 恵美子

次ページ座談会「大学で学ぶこと、大学で教えること、その姿勢を考える」

当センターとメディアセンターからのお知らせ〈本学教職員向け〉

動画『大学教育における生成系AI利用のあり方―ChatGPTの取り扱いと学問的誠実性の問題を中心に―』
上記春学期FDプログラムの動画を公開しました。ページはこちら（本学教職員限定）
https://spirit.rikkyo.ac.jp/cdshe/lecture/SitePages/fd_ai_20236023.aspx

「生成系をはじめとするAIの利活用に関する情報」サイトのご案内
生成系AIに関する情報を随時更新していますのでご活用ください。（本学教職員限定）
https://spirit.rikkyo.ac.jp/generative_ai/SitePages/index.aspx

Blackboardサービス終了のお知らせ
2024年度から授業支援システムはCanvas LMSに一本化します。
Blackboardは2023年度末でサービス終了となりますので、データの移行作業は2023年度中に行ってください。
https://spirit.rikkyo.ac.jp/canvaslms/SitePages/index.aspx

座談会

「大学で学ぶこと、大学で教えること、その姿勢を考える」

生成系 AI が広く利活用される時代が幕を明け、あらためて大学教育のあり方が問われています。立教大学は2023年5月12日に「生成系人工知能をはじめとするAIの利活用について」と題する声明文を発表しました※。そもそも大学とは、何を学び、何を教え、何を問う場であるのでしょうか。そしてそれらに向き合う姿勢はいかにあるべきでしょうか。今号では、学問に誠実に向き合う姿勢ー学問的誠実性ーをテーマとして学生・教員・職員の三者で座談会を企画し、学問的誠実性に関して教育、研究、ICTの観点からお話しいただきました。

※「生成系人工知能をはじめとするAIの利活用について」（2023年5月12日）https://www.rikkyo.ac.jp/news/2023/05/mknpps0000027wkb.html

登壇者

- 箕浦　真生 教授　（理学部、副総長（研究推進担当）、不正防止計画推進本部長、生成系人工知能に関する検討プロジェクト座長）
- 日髙　優 教授　（現代心理学部、教務部副部長）
- ラウシュ魁 さん　（法学研究科博士課程後期課程3年）
- 高橋　伸夫 さん　（異文化コミュニケーション研究科博士課程後期課程2年）
- 小川　龍秀 課長　（情報企画室（メディアセンター））

司　会

- 神田恵美子 助教　（大学教育開発・支援センター）

立教大学における学問的誠実性の醸成

神田　立教大学は、2023 年 5 月に「生成系人工知能をはじめとする AI の利活用について」と題する声明文を発表しました。生成系 AI が普及する中で、立教大学としてどのように学問的誠実性と向き合っていくかについて教えてください。

箕浦　西原総長が 2021 年 4 月の就任時に出された「立教大学ヒューマン・ディグニティ宣言」は、生成系 AI に対する声明文を検討する際に、非常に大きな意味がありました。その宣言には、「立教大学は、個々人の『人格と尊厳』（ディグニティ）が尊重され、それぞれの能力が最大限に発揮されるような、自由な学問と教育の場であることをめざしています」と述べられています。それに基づくと、学問的誠実性の「誠実である」こととは、人から信頼されて尊重されることだと言えます。互いの信頼や尊重がある環境では、個人の自信や安心感を得られるため、自己表現をしやすく、創造的なアイデア、研究に対する仮説を安心感を持って正直に伝えることができ、他者からの指摘や質問、批判も受け入れやすくなるのではないでしょうか。学問的誠実性の維持により、研究テーマに対して、自分自身の深い関心や情熱を持って、創造的なアイデアや新しい視点を持ち込むことが可能となり、結果として学問の発展に寄与、貢献できるでしょう。いかなるレベルにおいても学問的誠実性は堅持されるべきであり、本来的に、私たちが持っているべきものでもあると思っています。

箕浦 真生 先生

神田　教務部の観点から、改めて学生の学問的誠実性を担保するために必要な取組みについてお聞かせください。

日髙　立教大学として生成系 AI のメリット、デメリットを見定めて利活用していくという声明文に従いつつ、教務部が出来ることとして、従来と同様に不正行為、剽窃や盗用に対する注意喚起を継続していこうと考えています。ただし、授業内で何が不正行為に該当するかといったことは授業設計と密接に関わっており、教務部としては、そうしたことは科目担当の先生にご判断いただくものであると認識しています。この点を補足すれば、出典が匿名のもの、不明のものは使用しないのが学問の基本的ルールですが、生成系 AI の登場以前から、例えばウィキペディアという存在を通して現代文化を考えようという授業もあり得たわけですから、素材の扱い方や剽窃や盗用の考え方についても科目担当者がその責任において判断するという考え方の根本は変わっていないとも言えます。

神田　公正な研究文化を醸成するための組織的な仕組みの構築について、研究の観点からどのようにお考えでしょうか。

箕浦　研究の観点から学問的誠実性を確保するためには、研究倫理やガイドラインに従った研究活動の実施といった研究者個人の誠実性が求められます。加えて研究者の情熱や興味の方向性と、社会的な健全性の担保の両者のバランスが必要で、それを考える上では、学問的誠実性に基づいて判断していくということになります。教職員・学生の皆さんは倫理を守って研究活動

を進めてくださっていますので、さらに大学として組織的な学問的誠実性や研究倫理観の醸成を、折を見て節目ごとに行うことが大切だと思います。

神田　ラーニングアドバイザーやティーチングアシスタントのご経験があるラウシュさんと高橋さんから、学生に学問的誠実性を伝える難しさやこんな授業があったらよいのではないかと感じている点を教えてください。

ラウシュ　可能な限り原典にあたることが大切だと考えております。ネットで要約された情報を簡単に読むのではなく、原典にあたることによって初めて、読んでいる本人にとってどこが面白いのか、あるいは、どこが分からないのかということが見えてくるのではないかと考えています。学問的誠実性を育むための授業については、法学部 1 年生を対象とした基礎文献講読のような形で、難しい文献を難しいまま読んでみるという経験を積むことがよいのではないかと考えております。

ラウシュ 魁 さん

高橋　これまで私が学生たちと接してきたなかでは、学生が学問的誠実性の観点から「困る」という感覚はそれほど感じていません。「誠実であろう」という意識自体がなかなか学生側に共有されておらず、生成系 AI の文章を無自覚に自分の文章として転載してしまうこともあり得ると思います。学問的誠実性の感覚を育む方向に学生をどのように導いていけるかというところが課題だと思います。

神田　学問的誠実性を高めるために、学生・教職員は ICT をどのように活用できるでしょうか。

小川　仮に不正行為が起きた場合、学生本人もしかり、大学自体にも大きな損失を与えてしまうというリスクがあります。そういうリスクから学生・教職員を守っていくための ICT 活用として、例えば大学院生と教員が使える盗用・剽窃チェックツールである iThenticate や Turnitin といったオリジナリティや自らの研究成果をチェックするような仕組みがあります。Turnitin では AI ライティングのチェック機能が徐々に精度を上げて実装されてきています。これらのツールの意図は、不正行為をあぶり出すというより、自らの研究成果のオリジナリティを確認し、研究の独自性の大切さを考えるところにあります。こうした確認作業のプロセスが教育研究活動においては必要で、自身の研究活動のオリジナリティをもっと大切に持つことをしっかりと理解していただきたいというメッセージが一番強いのかなと考えています。

小川 龍秀 課長

学問的誠実性の文化を醸成する日々の実践

神田　日々の研究指導、授業、業務等でどのように学問的誠実性の文化を育てようと取り組まれていますか。

日髙　私は学生に対して、誠実の道を進むと困難もあるけれど、手軽には得難い喜びや楽しさがありますよと伝えています。それを理解してもらうために、授業を通じて実際にひとつの問いを巡って教員と共に格闘して調査や議論をしつつ探究し、一歩ずつ進んでいく学びの経験それ自体を味わってもらうことに腐心しています。私の授業では、例えば、写真家の作品を紹介して分析します。写真家が一体、どれだけの労力をかけて現場に行き、直に世界を見て、そこから何をどう撮るか。世界から撮るべきものを引き出してくる、その労苦をどれほど重ねているか。どのような時代になろうとも、誠実とはいつでも人間の領分ですから、たとえ見えにくくとも確かに為されているそのような人間の側の努力を観るよう、学生にも自らにも促しながら、学問的誠実性の文化を涵養するべく日々取り組んでいます。

日髙 優 先生

箕浦　学生には、研究とは過去の研究事例に何らかの形で必ず紐づいているのだと説明しています。先人の過去の研究に敬意を払い、適切に引用し、異なる意見や価値観にも耳を傾けて、自分の創造性を発揮してオリジナリティを出していく、自分自身の考えも深めるという流れを説明しています。実験研究に誠実に向き合っても失敗したということ自体が研究成果になるということも多々あります。自然科学では、自然が示したデータを先入観を持たずにありのままに受け入れて、適切に解析、判断するように指導をしており、自分自身もデータと誠実に向き合うことを日々心がけております。

小川　大学の ICT を支える情報企画室・メディアセンターとしては、学生の皆さんに安全、安心な教育研究活動を進めてもらうことが最大のミッションと考えて仕事に取り組んでいます。この座談会で、自分の文章が剽窃になっていないか確認したい学生や、不正行為に不安を持つ学生が存在すると伺い、そういった学生の不安や心配を ICT の活用によって取り除いていくことを大切に仕事にあたっていきたいと改めて強く感じました。

ラウシュ　文献を読んでいる際に「よく分からないがおそらくこういう意味だろう」と、文章やデータを都合良く解釈して読み進めたくなってしまうことはよくあります。もちろん、全てを調べ尽くすことは難しいですが、自分が納得できる限界まではその文脈や背景、関連する事項などを調べ尽くすこと、つまり文献に真摯に向き合うことが、私にとっては学問的誠実性の一つの

スタイルであると考えています。学生にも、わからない語句や文章が出てきてもさらっと流さずに、語句の意味を調べることから始め、少しずつ理解の幅を拡げていけば良いと伝えております。

高橋　学部生の段階で研究の対象と向き合うことの楽しさや喜びを見つけられると、不誠実にならずに学びを進められるというのは重要な点だと思います。一方で、学問的に誠実な研究をするためには、理論や先行研究を使って学術的に文章化するといった論文作成の技術も不可欠です。普段の学習支援では、押さえるべきポイントはこちらから伝えつつ、学生たちが自ら考え、アカデミックな技術や能力を伸ばしていけるような支援を心がけています。

学問的誠実性を育むための大学への期待

神田　最後に学問的誠実性を醸成するために大学に対して期待する点についてお伺いします。

箕浦　本学は「自由の学府」なので、学生の誠実性を伴った自主性を尊重し、学生が自ら考え判断できる環境の整備が求められます。答えのない問いを自由に議論し、互いに意見を出し合える場を提供することで、学生の自主性を育む場になると思います。併せて、優秀な先輩、良質なメンター、TA のような年齢の近い先輩がいつもどこかにいるような環境を整えることが、結果として学問的誠実性を育むことに繋がると思います。

日高　理想論かもしれませんが、優れた先人、範例、論文に対する憧れが生まれてくれば、おのずと誠実に導かれるので、それらを学生に示すことが非常に大切になると考えています。また立教大学のリベラルアーツの基盤としての言語、言葉を一層鍛え、大事にしていきたいという観点から、私は読書会を開催しています。地道な土台作りとして言葉を鍛える。言葉を大事にする取組みが更にさまざまに強化されたら、大学としてもよいのではないかなと個人的に感じております。

小川　今後も社会が大きく変化し、学問的誠実性が脅かされるような事態が起きても、立教学院創立時に掲げた自主性の尊重や自由に学問を探究するリベラルアーツの精神という本学のアイデンティティが助けてくれると信じています。不正行為に繋がるリスクがある中で技術を正しく使うというのは、個人の良心的な判断に委ねられていますが、立教大学の学生・教職員は間違った方向にいかないという良心や信念があると思っています。本学の学生は、新しいテクノロジーに対しても適切に判断し、上手に活用できる学生でいてくれるだろうと信頼しています。

ラウシュ　学生から「この引用方法は大丈夫だろうか」、「引用が多すぎないか」、「引用文のパッチワークのようになっていないか」という相談を受けます。不正行為について学生に説明する前に、自分自身で文章を書くということ、そして、他の人の文章を引用するということ、その意味や意義について理解してもらうことが重要なのではないかと考えます。

高橋　私が学部を卒業した大学は立教ではありませんが、学部生時代にライティングセンターで受けた指導は、学問的な文章や誠実性の感覚を身につけるのに非常に役立ちました。立教大学には英語でレポートや論文を書く学生が多くいますが、英語論文について相談できる場所がなく困っているという声も耳にします。多言語でライティングがサポートできる部署やポジションがあると、より多くの学生が無自覚にやっていたことを「ここがダメなんだ」「ここが不十分なんだ」と理解しやすくなるはずです。学問的誠実性の醸成とも繋げながら、大学全体として学生の学びを支援できると思います。

高橋 伸夫 さん

神田　大学教育開発・支援センター TL 部会としても、立教学院 150 年の歴史とヒューマン・ディグニティ宣言を基盤とした学問的誠実性の文化を醸成していくために、本日お話しいただいたような学問的誠実性を育む授業のグッドプラクティスの共有や学修支援コンテンツとしての「Master of Writing」の更なる充実を進めていきます。本日はありがとうございました。

編集後記

2023年4月、教学IR部会に太田知彩助教（教育社会学）、Teaching & Learning部会に原裕美助教（高等教育学）を新たに迎え、助教4名体制となりました。昨今、生成系AIは急速に進化し、その影響は教育領域にも及ぶようになりました。5月には立教大学として生成系AIに対する声明文を発表しました。6月の生成系AIをテーマとした春学期FDプログラムは過去最多の参加者数となり、生成系AIに対する教職員の関心の高さが窺えました。当センターでは、これまで以上に、立教大学における学問的誠実性の重要性を学生・教職員に伝えながら、今後も生成系AIを含めた教育の国内外の動向に注視し、FDプログラムや情報提供を進めていきます。どうぞご期待ください。

「MOVE 第30号」
立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会 ニューズレター
2023年9月27日発行

発行　立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会
〒171-8501　東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel：03-3985-4624　Fax：03-3985-4615
E-mail：cdshe@rikkyo.ac.jp
https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html